
そして天命を成就する

ゆこと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして天命を成就する

【Nコード】

N7456X

【作者名】

ゆこと

【あらすじ】

神童と呼ばれる異能力者が存在する世界。その異能を人々は神業と言い、世界の趨勢はそれらに左右されていた。国立天野岩学園に入学した主人公は、己の天命を無事成し遂げるために日夜奔走していく。謎設定が盛りだくさん！主人公最強系学園ファンタジーです。

入学試験道中にて（前書き）

プロローグ

入学試験道中にて

1月も後半に差し掛かり、正月のどこか浮ついた雰囲気は霧散霧消してしまっている。いや、霧散霧消どころか自ら好き好んで打破している人種が存在しているくらいだ。それが受験生と呼ばれる部類の人達であり、ご多分に漏れずというべきか、この俺伊滄いそう 諾だくもその内の一人だ。そして今日が運命の受験当日であり、昨日までどこ吹く風と平常運転だった俺の心臓も心なしか鼓動周期が早くなっている気がする。自分でも心臓の脱毛っぷりには呆れてしまうものの、どこか懐かしい緊張からくる浮遊感のような感覚を楽しんでいるのもまた事実だ。

俺が受験し、近い将来在校生一覧に名を連ねようと一計を案じている学校は、日本でも有数の名門かつ専門かつ有名な高等学校である国立天野岩学園だ。こくりつあまのいわぐえんこの天野岩学園とは、全国でも13ヶ所しか存在しない“神童”育成を目的とした高等学校であり、13の学校の頂点に君臨している。そのため毎年優秀な生徒が我こそはと受験を受けに来るのだ。

天野岩学園は淡路島に創設されており、実家が遠く離れた場所にある受験生は前日、より確実性を求める受験生は2日前から淡路島へと来島している。俺も昨日ホテルへチェックインした受験生の1人だが、抜かりなく受験会場への道筋は調べていたためホテルから学園への道筋に迷うことはない。早朝ホテルを出てから30分ほど歩いているもののその足取りに不安はなく、そろそろ学園の姿が拝めるかもしれないと思案していた時である。

先程からちらほら伺えるようになった受験生の中に、まるで肩が常人の3倍ほどの重さなのでは無いかとこちらの思考を不明瞭にさせるほどに肩を落としている女の子を見つけた。どうやら学生服なところを見ると、彼女も周囲の学生と同じく受験生であろうことは容易に察することができたが、にしても妙な空気を纏っている。確

かに受験生は誰でも多少の焦燥感や緊張感を持ち合わせているものだが、彼女のそれはむしろ落胆や諦めといった負の色が濃い印象だ。このままのコンディションでテストに挑もうものなら満足行く結果は望めないだろし、周りを見ても彼女に手を貸してあげようといったメシア的存在が現れる様子もない。

「ま、仕方ないな」

正直多少は緊張しているものの、俺は試験自体に全く憂いが無い。ここで彼女の学業成就に尽力するくらい心の容量は空いているのだ。

昨日から「チェックインお願いします」しか発していない運動不足の発声器官に軽く仕事させておくのもアリだろう。よし、声を掛けてみよう。

「どうも、おはようございます」

「えっ、あ・・・お、おはようございます」

うむ？人見知りなのだろうか。だとしたら余計な緊張をさらに背負わせてしまったかもしれない。彼女の肩は定員オーバーじゃなからうか。もっとも、初対面の人にいきなり挨拶されても困惑するのは当然といえば当然だが。

ここは緊張をほぐしてあげよう。

「なんだか、海に潜って1分ほどの海女さんのようでしたので」

「あ、海女さん・・・？」

「つまり浮かない様子だったという事です」

「あ、ああ成る程・・・」

どうしよう、張り詰めた空気を弛緩させようと思って放ったジョー

クが逆に作用してしまったようだ。見てみる彼女の顔を。「この人受験当日に脳の中身をプリンにでも置き換えてきたのかな？」とでも言いたげではないか。軽くゾクゾクする。

「もとい、なにか気がかりな事でもお有りですか？同じ受験生として多少は尽力いたしますよ」

「いや・・・むしろ受験生としてなら手助けはしない様な気がします・・・」

「ははは、なるほど言われてみれば然り！」

「・・・なんだかおかしな人ですね」

おお、どうやら軽口が功を奏したようだ。先ほどまで軽く変質者を見るような眼差しだったのが、変だけど良い奴を見るような眼になっている。割合的には変が7でいい奴が3。

「そうですね、いきなり会った人に相談することでも無いんですけど。聞いてもらえますか？」

「ええ、それはもうなんなりと」

「ここまで来てなんですが、受験に受かる気がなくて・・・。というのも私、所有神業数が1つなんです」

・・・なるほど。

“神業” それは神童と呼ばれる異能力者が所有する超自然的な能力。天野岩学園は日本で頂点に立つ神童育成学校とは先程説明した通りであり、全国1位ともなると集まる神童のレベルも尋常ではない。所得神業数が1つというのは天野岩学園ではあまり優秀とはいえないステータスであり、それで悩んでいるのも納得である。

「確かに所有神業数が1つというのは合格条件に照らしあわせてみても厳しい物がある。“特例階級”に入れるようなレアスキルだと

・・・スカートなのに思いつき振りかぶって蹴ったなこの娘！！
最初の印象よりアグレッシブだし、もしかしたらこっちが素なのか？
しかし、これで思惑通り（・・・・）に行動してくれた。後は彼女
次第だが、これで大丈夫だろう。

「・・・・・・・・ツ、おおおおおおお！？」

「おお、見事なトゥーキック。これはもしかしたらサッカーの才能がお有りですか？」

「そんなことはどうでもいいんです！！神業が、新しい神業が発現しました！！」

まあそうだろう。なにせ彼女の“天命”成就条件まで残り1蹴りだったんだから。

先ほどの、全力の1蹴りが欲しかったのだ。

「なんだかわかりませんが有難うございます！！これで合格の可能性が2倍・・・・いや3倍は固いです！！」

先ほどとは打って変わって狂喜乱舞している。間違いないこっちは素だ。しかし3倍って・・・一体最初の合格率は何%だったんだろうか。20%くらい？

「それはお目出度い！これで貴方も後顧の憂い無く受験に挑めそうですね」

「はいっ！どうも有難うございます。あのあのわたし、石生 那美いそなみって言います。よろしければ名前を覚えてもらっても？」

「石生那美さんですか。偶然ですね、私も“いそう”なんですよ。伊滄諾です、今後もよろしく。お互いの名前を知ったことは私の中では友人になったって事とイコールなんだ。これからは敬語抜きでいいかな？石生さん」

「那美でいいよ、私もよろしく！お互い合格したら同じ学園の生徒になるんだし、長い付き合いになるといいね」

こうして彼女、石生那美とのファーストコンタクトは無事に終わった。その後は他愛もない会話をしながら学園へと歩いたものの、5分ほど歩いただけで正門にたどり着いてしまい、実際には雑談をする暇はあまりなかった。正門には広大な学園のマップと6ブロックに分けられた受験会場の詳細が巨大な掲示板に掲載されている。毎年600人が受験するとされている有名学校だ。複数の会場に分けられるのは当然の処置だろう。

「受験番号だと・・・私は右の受験会場みたい。」

「残念、俺は真っ直ぐ行ったトコみたいだ。それじゃあ、入学試験がんばって」

「うん。そっちもがんばってね！」

とお互い励ましあった後那美さんと別れ、当初の予定通り単身で自らの受験会場へと向かった。

しかし、なかなか可愛い娘だったなあ・・・

入学試験道中にて（後書き）

初投稿＆処女作です。のんびりやっていきたいと思います

入学試験開始

ここで入学試験の内容について説明しておこうと思う。試験は二週間かけて行い、学力・運動能力・神力の3分野に分けられている。

学力は言わずもがな、世間一般のテストと同じで数学や外国語などの合計6科目を2日かけて試験する。

運動能力は体力テストの豪華版と考えて良いだろう。様々な器具を使用し、3日かけて身体能力を計測する。

その2つを合わせた計5日間が初めの一週間である。

そして残りの一週間。ここが登竜門であり天王山。

この世に存在する異能力者。彼らが使用する能力こそ神業であり、その能力値を計測するのが二週間目の神力テストなのだ。

確かに最低限の体力や知識は必要なものの、この学園で最も重視されているのは神力だ。そのため神力の合格に関係する比重も自然高くなり、極端な話神力がずば抜けていれば最初の一週間のテストが零点でも合格する可能性はある。

二週間目からが本番、最初の一週間がプレテスト仮試験と呼ばれる由縁はそこにある。

しかし、大多数の人間はそれほど高位の神業を所有していないので仮試験といえども全力で挑戦する。故にこの学園の偏差値は決して低くなく、むしろ進学校としても成り立つ程なのだ。

（俺も余裕ぶつてないで、この一週間真面目に頑張るか。最初の日
は数学・国語・理科だったかな。）

そう考えながら、筆箱からシャーペンと消しゴムを取り出したのだ。
った。

こうして、初めの一週間は淡々と過ぎていった。

一言だけいっておくと。

他校の体操着は目の保養としては十全だった。

さあ二週間目（本番）開始。慣れとは恐ろしいもので、初日はあれほどぴりぴりしていた受験生達も、三日もすれば緊張感が薄れてしまい、現在では仲のよいグループを作って騒然と喋っている有り様だ。

ま斯く言う俺も親しい奴が1人できた。それが、今俺の横を気だるそうに歩いている彼、和久産巢 わくむすかすき 和樹だ。受験グループもだが、チエックインしているホテルが一緒だったため、行動を共にしているうちにそれが習慣になってしまった。俺としてはなぜこんな倦怠感丸出しの男なんか、と思わなくもなかったが話してみるとなかなか面白い奴で、今ではお互い下の名前で呼び合う仲になった。ストックホルム症候群的な効果だろうか。

そんなわけで、男2人早朝から学園へと向かっているところだ。

「今から本番だが、調子はどうだ？」

「まあぼちぼちってとこさ。てめえはどうなんだ諾」

「俺は最初から問題ないさ。神業も学力も無難にこなせる」

「相変わらず卒のねえ奴。そのまま留年しねえもんか」

「和樹こそ、口ではそんな事言いながら今のところオールクリアじゃないか」

「バカ言え、運動でなんとか盛り直したが学力はさっぱりだぜ」

「答え合わせしか限り、平均70点だったじゃないか」

「この学校の平均しってんだろ？70点じゃ17点足りねえ」

「まあ神業で劣ってる生徒はそこらへんでカバーするしかないからな。その点和樹は大丈夫だよ」

「まるで俺の神業を知ってる風な言い方だな？」

「いやいや、唯の勘ってやつさ」

「まったく、食べねえ野郎だ」

と、他愛のない会話を30分ほど続けていると、もはや見慣れた感のある天野岩学園の姿が目映った。と、校門前に見慣れた人影がどうやらあれは那美さんらしいが、初対面の時の面影は一片も残ってはいない。その証拠にほら、なぜか朝からスクワットをしている。やはり彼女も面白い。

「おはよう那美さん。今日もハツラツみたいだね」

「おはよう諾！しかし、朝っぱらから人を焼肉みたいに言わないでよね！！」

ここ一週間で判明したことだが、那美さんの例えツツコミは少々風変わりらしい。それもそれで愛すべき特徴なのだろうか？

「おはつす那美。相変わらず意味わかんねえなお前」

「ちよつと、和樹君まで人を諾君扱いして！！失礼しちゃうわ」

「それは俺が変人だってことかい？那美さん」

かなり聞き捨てならない。俺は至極全うな人種だと自負している。

「おつと、そりゃ悪かったな那美。謝る」

「わかればいいのよ、わかれば」

一体俺は何をしたんだろうか。変態的な要素はまだまだ出していないはずだ。滲みでているのかもしれない、オーラのものが。

「スルーされたことは俺もスルーしよう。しかし那美さん、今日はなぜ校門前でスクワットなんてしてるんだい？」

「理由は2つあるわ。1つ、今日から始まる本番は会場が変わり、

受験生は全員巨大掲示板前に集合するから、諾君たちを校門前で待っていた。2つ目は、本番に備えて体を温めていた。Q・E・D・証明終了!!」

「なるほど。そうなるとおかしいのは君の頭か俺の知識か、どちらかみたいだ」

「安心しな諾。運動能力試験の前ならいざしらず、神力試験前に体を温める必要はねえ。簡潔に言えば那美の頭が温まってるってことだ」

「誰が間欠泉ですって!!」

そしてやかんのようにピーピー怒っている。熱エネルギーが豊富な人だ。

「わかってないのはそっちの方よ。試験なんてのは気持ちの問題なんだから、ヤル気を出すためには多少の運動が必要な。でしょ、諾君」

「多分俺に振ったのはこの前の出来事からのインスパイアだと思うんだが、道で石を蹴るのとスクワットを公衆の面前で実行するのは、天と地ほどの差があると思う」

「違いねえ」

「もついいわダブル頭でっかち!さっさと掲示板前まで行きましよう」

誰のせいで時間を消費したと思っている。なんて言葉を丁寧に咀嚼してから俺達は那美さんの後ろを連れ立って歩く。ちなみに、先ほどの会話中も彼女はスクワットを続けていたことは報告しておこう。

「いやあ、改めて大きい掲示板ね。」

「確かに。えっと、『本日からの試験内容は神力およびそれに関する計測器具に対して受験生が多いため再びグループを2つ

に分け、それぞれ担当の教員が引率する。グループ名簿は右下に表示しているため各自で確認した後時間まで待機しておくこと」だったさ」

「お前よく読めるな。いくらデカイと言ってもここから掲示板まで10Mは離れてるぜ？」

「生まれつき眼が高性能なのさ。グループは・・・俺と和樹がBグループ、那美さんがAグループみたい。残念だ」

「ゲッ、また1人だけハブなの？待ってた意味ないじゃない！」

「まあまあ、コレばかりは仕方ないよ」

「仕方ねえよ」

「1人は精神的に安定しないのよ！つまり寂しい」

「そんなはっちゃけてるくせに、お前人見知りだもんな。」

「うきー！ー！！」

【ピンポンパンポン】

何時の時代も変わらない趣きのある校内放送開始音が鳴り響く。もう時間か。

【これより神力検査を行います。Aグループは八咫（やた）教諭と共に体育館、Bグループは高央教諭たかおと共に格技場へと向かってください。】

「俺たちはBグループだったな」

「ああ、そんなわけで那美さん。ここでお別れだけど、頑張つてね」

「言われずもがな！！お二人とも、入学式で会いましょう！！」

そう元気に言い放ちながら、嵐のように那美さんは去っていった。入学式まで会わないつもりらしいけど、お昼時とか遭遇しそうな気がする。

そうして格技場へと場面が変わる。

日本有数の学校だけあって格技場も通常の規模ではないらしい。大きな正面入り口（余談だがスイングドアが6つ付いていた）を抜けると正面と左右合計3つの引き戸に加え、二階へ続いているであろう螺旋階段がテラス中央から垂直に上へと伸びている。ここでは柔道・剣道・弓道などの武道はもちろんのこと、ダンス、マーチングバンドなどの演武会に、コンサートや格闘技（ボクシング、レスリング、総合格闘技）などなど、多種多様な用途に用いられるらしい。格技場というよりは日本武道館のような佇まいである。これを見れば、いかに今の日本が神童育成に力を入れているかがわかるというモノだ。

俺たちが使用するのは玄関から入って正面の引き戸を開けた先、どうやら格技場で2番目に大きい部屋らしい（引率の教師が紹介していた。たしか高央教諭だっけか）。300人強が入ってもまだ余裕があるこの部屋は、床が全て畳になっている事からみても、柔道などの使用目的で作られたのであろう。しかし、一般的な格技場とは規模がケタ違いである。イメージとしては高級旅館の宴会広場に近い。

よくみると、壁際に6台ほど機械が置いてある。いや、置いてあるとは適切ではなく、事実を忠実に伝えるためにはこう表現しなければならぬだろう。浮いている（……）と。

大きさはバスケットボールと同程度、球状で一見真つ白い玉だが、集中して観察するとシャボン玉のように球の表面に幾何学模様が回っている。確かあれば……

「総合神力計測器。通称TGPMか」

「TGPMって、最近軍が開発したっていやつか？」

「まさに。個人が所有する神業を数値化するのはもちろんのこと、

その特性から応用力まで大まかに計測できる最新機器。今まで他人の神業を知ることが難しかったために起こってしまった事件を元に、それらを防ぐ手立てとして開発されたのがあれさ」

「軍用機器をあんだけ用意するなんて、つくづく食えねえぜこの学園」

「あれ1つで新規の学校が建設できるらしい」

「全体的にアホだな、ここは」

最後の意見には全面的に同意しておこう。

どうやら前列のT G P Mによる検査が開始されたようだ。一人につき10分ほどの時間を要するため、最後の検査が終わるまで8時間以上。今日はこの検査だけで一日終わりそうだ。

一応整理券のようなものが配られているため、時間に注意すれば昼食なり散歩なり自由に行動できそうだ。和樹と俺は連番なため、予定検査時間もほぼ同じ。

さて、どうやって時間を潰そうか・・・

邂逅と検査

自分の検査時間がくるまで、校内を散策する事にした。

只でさえ広大な敷地だ。試験中は指定された会場しか見ていないため大部分の施設を把握していないし、在校生は試験期間中休み。危険物が置いてある場所にさえ近づかなければ少しくらい見学しても大丈夫だろう。

今は格技場をでて西、掲示板の所から北の場所に位置する二号館の中を歩いている。校舎本体は一号館から三号館までの本館と四号館から六号館までの副館で構成されており、本館では授業、副館では実習と用途別に使い分けているらしい。つくづく経費削減とは対局な学園である。

一階二階とブラブラ歩き、二三階へと足を踏み入れた時だ。大きな違和感を感じた。

これは……紫乃宮家の守護領域？
ゆかりのみや

検証するため神業を発現。右手を軽く握り、周囲の空気を集める。

（やはり。普段より風の巡りが悪い）

大幅な神業のランクダウンは紫乃宮家の守護領域たる証拠。しかし、どうしてこの場所が？

訝しんでいると、前方から声がした

「どなたかそこにいらっしゃるのでしょうか。遠慮せず入ってらっしゃい」

向きから察するに右前方のドアかららしい。近づいてみると、ドアプレートには“黒袍会”こくほうかいと書いてある。黒袍会、一般的には生徒会と呼ばれる組織だが、この学園ではそう呼称している。

そついえば、今代の黒袍長は紫乃宮家の才女だと聞いた気がする。今更思い出すとは俺の記憶力も捨てたものらしい。捨てておこう。

（相手が紫乃宮家なら、遠慮する必要もないか）

一応周りを確認してみたが俺以外に人の姿はない。なら、間違はなく先程のは俺に言ったセリフだろう。ドアノブを回し、中に入る。部屋の中には一人の女性しか確認できなかった。いくつかのワーキングデスクが並ぶ中、一際大きなそれに向かいながら作業をしている姿は、さながら休日に詩を嗜んでいる令嬢といった風情だ。

使用しているデスクが他のと違い孤立している所から、この女性が黒袍長であることが十分に予想できる。それに、彼女纏う雰囲気アーキテクチャが十二分に物語っている。彼女が7華族が1つ、虹神の建築士と呼ばれる紫乃宮家の一員だと。

「あら、見ない顔ですわ。それにその制服、もしかしくても受験生ですわね」

作業する手を止めてこちらに目を向ける彼女。目が合うとより実感できる。彼女がこの場を改変している人物だと。

「お初にお目にかかります。見たところアナタお一人のようですが、休日にも事務仕事ですか？」

「ええ、作業が滞っていますの。昨日もその前もサービス残業。もう目が廻ってしまいますわ」

「それはそれは、心中お察します。おっと、挨拶が遅れてしまいました。私は伊滄諾と申します」

「これはご丁寧に。ワタクシ、この学園で黒袍長を勤める紫乃宮ゆかりのみや知流姫と申しますわ」

やはり紫乃宮、それも知流姫か。直系の、それも長女とは。直にお会いしたことはなかったが、話だけは聞いている。別名“完全無欠の箱要り娘”ブラックボックス

「伊滄・・・もしかしてあの（・・・）伊滄家かしら？ “神眼”の」
「お恥ずかしながら。その伊滄家で間違い有りません。母の聖がお世話になっております」

「まあまあ、それは失礼してしまいました。聖さんには昔から懇意にさせていただいてますわ。」

このやり取りで判ると思う。紫乃宮と伊創家は昔から知らない中ではないのだ。もっとも、それは母である伊滄聖のおかげであり、俺自信はあまり紫乃宮に関わったことがない。それでも、両家はお互い対等な関係として互いに接しているため、俺もその例に従ったほうがいいだろう。

「貴方のお話は母から良く聞いています。とても優秀な女性だと」
「お恥ずかしいですわ。ワタクシは何も優れてなどおりません。全てはあなたのお母様のおかげです」

「いえいえご謙遜を」

「真実ですわ」

「おっと、そういえば」

このままでは話が停滞してしまいそんな気配がしたので、話題を変える。

「この階、このフロアだけ守護効果が発生しているようですね。」

もしかして、この二号館は紫乃宮が手がけたのですか？」

「御名答です。しかし、ここだけじゃありませんわ。体育館から格技場から全て、この学園内の建築物は私達紫乃宮家が創造いたしました。」

啞然とする。紫乃宮の固有技が、まさかこれほどの物質創造能力とは。

「・・・改めて規格外ですね。虹神と二氏神にじがみの仇華族きゅうかぞくは」

「ま私は先代の偉功を借りているだけに過ぎませんの。今の私ではアレらを創造することは想像すら難しいですわ。」

そう公言するわりには、全身から自信が溢れているように見受けられる。一筋縄ではいかないオーラである。

「ちなみに、校内は有事の際でない限り神業使用を許可しておりませんの。次からは注意しておいてもらえませんかしら」

「重ね重ね申し訳ありません。次回から考慮します」

「それだけ伝えておきたかったのよ。判っていただけたよううで何よりですわ」

「はい。しっかりと記憶しておきます」

記憶はさつき捨てた気がするけど。

後で拾っておこう。

さて、挨拶も済んだことだ。これ以上事務仕事の邪魔にならない内にさっさと退場したほうがいいだろう。

「では、私はこれで失礼いたします」

「散歩中にごめんなさいね。合格したらどうぞ宜しく。貴方なら

大丈夫だと思いますわ」

「こちらこそ、その時はお願いします。先輩」

軽くお辞儀をしながら後ろ手にドアノブを捻り、後退するように部屋を出た。

そうして、予想外の会遇は終わった。

ふと時計を見ると10時30分を過ぎている。検査開始が九時で、俺の神力検査待ち時間は2時間ほど。そろそろ格技場へ戻ったほうが良さそうだ。

入学前に黒袍長と知り合えたのは大きな収穫。やはり、時間は有意義に使うものだな。

満足気に微笑みながら、俺は目的地までの移動を開始した。

「おう、やっと来たか諸。次は俺たちの番だぜ」

「ギリギリだったか。心配かけて悪かったな」

「別に心配してねえよ。それより、なにか収穫でもあったか？」

「美人とお近づきになれた」

「なんだと！チクシヨウてめえについていきや良かった」

「お前はどうかだったんだ」

「どうもこうも、見に行った国営農場はすげえ荒れてるし、園芸部は初心者ばかりで問題外。あれじゃあ数年後は世紀末並の荒野になるぜ」

「そんなに酷かったのか」

「ま、俺が入学すれば豊作まちがいねえがな」

「そのためには検査だ。どうやら俺たちの番らしいぞ」

どうやら俺たちの前のグループが検査を終えたらしい。すぐに次の検査準備を開始し、程なく完了した。

名簿を持った高央教諭（黒髪ショートで切れ目が特徴的なお姉さん系美人だ）が順に名前を読んでいく。

「次！受験番号362番。伊滄諾。三番機器の前に」

「それじゃあ行こうか」

「しくじんなよ」

「ただの検査さ。失敗も何もない」

「次！受験番号363番。和久産巢。和樹。四番機器の前に」
「うつす！」

6人全ての名前が呼ばれ、それぞれが機器の前に立つ。

「各自それぞれ所定の位置に着いたな！よし、これより神力検査を行う。プライバシーを考慮して、検査中は使用者以外機器に近づけなくなるから注意するように。」

今の時代、誰がどのような神業を所有しているかなんてのは特秘事項の一つだ。確かに、軍用機器で調べられたデータを他人に知られるのは勘弁願いたい。

「それでは検査を開始する。スキャンそれぞれ割り振られた機器に両手を当てて受験番号と名前を呟け。あとは自動で検査される。では、始め！」

すると、左右から口々に受験番号と名前を囁く声が聞こえる。

（俺も始めるか。設定は2・・・いや、念のために3だな。4以上だと下手したら特別階級になってしまうかもしれない。・・・よし、これで大丈夫だろう）

「おい伊滄受験生！後がつかえてるんだ、早く始めたまえ」

おっと、慎重に考えすぎたようだ。
すぐさま両手をTGP Mに当てる。

「受験番号326番。伊創諾。」

名前を言い終わるやいなや、先ほどまで球表面を無軌道に動き回っていた幾何学的模様が手の接着面に集まってくる。手のひらが若干熱を感じ始めるとともに、体全体にじんわりとした異物感を確認する。

どうもこの感覚は慣れない。体中をまさぐられているような感触だ。実家にある旧式のTGP Mと同じ・・・これなら俺の神業も通用するだろう。

七分ほど経っただろうか。全身に巡る不快感が小さくなり、消えた。そして、球体に文字が表示され始める。

《総合神力	130GP	天人》
《分類	身体能力	A・風遣い
	A・観察眼	A》
《危険度	C	ランク》
《身長	172cm	》
《体重	63?	》
《身体異常	無し	》

最新式なだけあって神業の名称まで判明するのか。実家にあるタイ

プと若干違うが、俺の神業は上手く作用しているらしい。 130G
Pなら十分だろう。

神力関係以外にも色々と表示されているが、特に重要ではないため
気に掛けない。

「どうやら全員の検査が終わったようなので、両手を機器から離し
速やかに検査の邪魔にならない場所へ移動しなさい。」

指示通り、和樹を拾って格技場の外へ出る。今日はこれ以上学園で
することが無くなったため、帰り道で昼食を食べ、そのままホテル
へと帰ることにした。

邂逅と検査（後書き）

読んでいただきありがとうございます

実技試験その1

二週目、試験本番の試験項目は三つに分類できる。

一つは検査、^{スキャン}一つは実技、一つは複合応用。

検査は、昨日のTGP Mを用いた身体・神力検査。

実技は、所有神業を単体で使った際の能力の測定。

複合応用、これは文字通り複合技の試験。2つ以上の神業を合わせてみたり、剣術や体術に神業を混ぜてみたりと様々だ。

神業はそれ単体でのチカラも強力だが、その他の要素と組み合わせることでよりオリジナリティに富んだ能力となる。例えば同じ身体能力強化でも、剣術と組み合わせれば達人の剣士を凌駕できる程の動きを実現でき、また別種の神業を組み合わせることですらなる超常的な技術へと進歩させられる。要は応用力が重要なのだ。傾向としては、やはり実技よりも複合応用が重視される。

実技試験は、同じような系統で会場を分けられ、一日で全ての試験を行う。そして、残りの3日で応用複合試験を実施するのだ。

本番二日目。いつものように校門で和樹と別れ、最初の会場である一号館へとたどり着いた。

この一号館および四号館では、物質操作系統の神業を試験するようだ。館内に複数設置されたモニターには、試験経過がリアルタイムでモニタリングされている。神業を扱っている神童の情報は巧みに隠されているため、誰がどの神業を使用しているかは判別できないようになっている。モニタリングは、試験方法を事前に知らせることで速やかなテスト実施を促すための措置であろう。

画面では、空中に浮いた水が的に向かって射出する攻撃性の試験が映っているかと思えば、火を操り特定のターゲットだけを燃やす操作性の試験、ただただ目標の物体を破壊する最大出力試験など、他にも保持性や自由性と様々である。

複数の試験を受け、その中で最も得点の高い試験項目がその神業の得点となるようだ。

俺がここで計測するのは『風遣い』のスキル。風を自分の手足のように使役することができる能力だ。特徴はその自由度と単純な攻撃力だろう。よって、自由性と攻撃性の二項目のテストを受けることにする。

特設されている受付で選択したテストを受けるための手続きを行い、個人のタイムスケジュールが書かれたカードを貰う。どうやら攻撃性の試験がすぐに行えるようだ。一号館から四号館へと続く渡り廊下で、警備員のように立っている係員にカードを提示し、通してもらう。誰がどのテストを行なっているかがわからないように、四号館の窓はすべて黒塗りになっているため少々薄暗い廊下を歩いていると、目的の実習室にたどり着いた。合成音声のガイドラインが始まる。

？ここにちは！！攻撃性試験のナビゲートを担当するアタックだよ！？

ネーミングが安直極まりないな。アタックって・・・

？この教室に入ると、机の裏や天井など、いたるところからターゲットが現れるよ！そのターゲットを破壊した個数が得点になるからね！！？

単純な目標破壊か。しかし、ナビと試験内容のせいでアトラクション感が拭えない。子供が喜びそうだ。

なんかワクワクする！

？時間は2分間！ターゲットには得点によって色が変わっていて、

赤は1点・黄色は2点・青は3点だよ!?

間違いない。製作者が調子に乗った結果アトラクションと区別がつかなくなったパターンだ。俺って、遊園地とか冷めちゃうタイプなんだよ。

上着を脱ぎ、カッターシャツをまくり上げる。

?それじゃあ、教室に入った時点でスタートだよ!頑張ってね!!

「レッツパアアアティーーーーー!!」

渾身の力でドアを開け、教室に上がり込む。

入ると同時に、机の裏・教卓の下・ロッカーの中・天井、案内通り至るところから標的が飛び出してくる。その数6

「目標認識!全座標確認!!」

右手を前へと突き出し、風に念じる。尖り、研磨し、やがて風は一つの刃と化する。

「神業行使!!“鎌鼬”」

基本的に神業は念じるだけで発動できるものの、イメージ力が強いほうがより想定した技を行使できる。そのため、俺は使用する技名をよく言葉にする。

6つの凶器と成った風は、思い描く軌道で全目標を真つ二つに断裁していく。目標を破壊した鎌鼬はすぐさま周囲の風と同化し無害な空気へと還元。目的以外の無駄な破壊を行うのは素人以下だ。

ガシャン！！ガシャン！！

再びターゲットが出現。その数12。先ほどの全く同じ工程を繰り返すことで目標をも同じ結果へと導いていく。

俺の神業『風使い』は、風を自在に操るだけのスキルではない。風を自らの手足のように行使する能力だ。手足、つまり触覚を空間に接続できる。このチカラの最大の利点。それは認識空間の拡大に他ならない。

だから、見えてなくても確認できる。

真後ろ、入り口付近に置かれた掃除道具箱やチョーク入れなどから出現したターゲットを背を向けたまま破壊する。

教室中が暴風のような奔流に巻き込まれながら、試験時間はあつというまに過ぎていった。

？ピピー！おつかれさま！！時間になったので教室から退室してね！！？

教室のドアが自動で開き、外室を促す。
廊下に出て、置いていた上着を着る。

？あなたの得点はこちら！！？

と、教室入り口に取り付けられた画面に数字が表示される。

96点

途中、重なったターゲットの二枚目を二度逃してしまった。試験開始時に鎌鼬の設定を一撃還元を設定したために貫通性を失い、目標を逃してしまったのだ。

しかし、96点なら十分な点数。
申し分ない結果に満足しながら、一号館への帰路を戻っていった。

それから20分後。自由性試験の順番が巡ってきた。先ほどの手順どおり、渡り廊下で係員にカードを見せ、教室へとたどり着く。

「やあこんにちは。自由性試験のナビゲートを担当するフリーだ？」

内容に凝りすぎて名前が適当になるのはどの世界も同じらしい。

「この試験では、与えられた課題をどう処理するかで得点を決める。課題完了までの時間や発想力など総合的な採点になるだろう？」

なるほど。確かに自由度が高くないと合格できそうにないテスト内容だ。

「今回の課題は“隠れんぼ”である。教室内であるものを提示して欲しい？」

どうも神業試験は遊びの要素が多い。先程もいったとおり、イマイチ遊びでは盛り上がれない十代なのだ。

で、一体なにを探せばいいんだ早く教えてくれさあ早く!!

「探索物は、この学校の“エンブレム”。なお、大きさや材質は答えられない。制限時間は5分。説明は以上だ。」

試験の内容としても自由性が高いな。どんなものか全然予想できない

い。

隠れんぼというより宝探しだ。いや、むしろ推理要素が強いか？

？教室に入った時点でタイムアタックは始まるので注意するようにでは、始めてくれたまえ？

攻撃性の試験で高得点を取ったため、この試験の結果が低くても関係ない。なら、緊張せず楽に挑戦しよう。教室へと入る。

「えっ・・・？」

そこには、何もなかった（・・・）。

教室には、先ほどの試験とは逆に机や教卓、黒板などの用具・雑貨が一切排除されていた。タイルの床とコンクリートの壁だけの閑散とした箱だ。

隠れんぼと呼称するからには隠れるだけの場所が必要なはずである。しかし、遮蔽物が一切取り除かれているこの空間はその常識を根底から覆している。

「どういう事だ・・・」

これは試験だ。正解は確実に存在するし、それに至るための手がかりは既に得ているはずだ。

先ほどのナビゲーションを思い出せ。

エンブレム・・・

大きさや材質は答えられない。

教室内であるものを提示してほしい。

「ッ！！成る程！」

答えられない。つまり、大きさや材質は試験者によって千差万別なのかもしれない。だからこそ答えられない。逆にいえば、大きさや材質は何でも良い（・・・・・・・・）のだ。

「神業行使。 “風圧圧縮”」

“風圧圧縮” 指先に周囲の空気を集める事で、極小の一点に小規模な竜巻が生まれる。圧縮され暴れ狂う風は触れたものを削り取る穿孔機のようなものだ。

右手の人差指の先端にソレを作成した俺は、膝をつき床のタイルを削る。

ガリガリと物体を食い散らかす音と共に現れたのは、床の傷で表現したこの学校のエンブレムの絵。

設問通り、教室内にエンブレムを提示してみせた。

隠れんぼ・・・その種目名こそミステイクションであり、本来の目的は瞬間的な発想とそれを実現する技の応用力。文字通り自由度を試された訳だ。

探すものがない隠れんぼ。

自由すぎる・・・

?ピンポンピンポン!?

おそらく正解の表明であろう安い電子音が響き渡る。

?問題なくエンブレムを提示してもらった。よって、この試験を終了する?

その後確認した所、この試験の得点は97点。攻撃性よりも高い点数を得ることができた。

ちなみに、実技試験の平均点は67点。それと比べても十分以上な結果だ。

物質操作系統試験を終えた俺は一号館の受付でカードを返却し、
“身体強化”の試験会場である運動場へと舞台を移すことにした。

実技試験その2

運動場には巨大なプレハブの建物が幾つも建てられていた。

この会場では身体強化系の神業を試験・審査するため、どうしても大きな会場が必要なのだろう。飛んだり跳ねたりが主な能力である身体強化はどうしてもダイナミックな動きを必要とする。

この会場の受付を済まし、一号館同様カードを受け取る。

何気なく周りを見渡してみると、そこに見知った顔を発見した。

校庭隅のベンチで寝転んでるそいつに近づいてみると、どうやら俺の見間違いじゃあなかったようだ。

「和樹、お前もここで試験か」

「おう、てめえもか。ここに居るってこたあ、身体強化系のスキルホルダーってわけだ」

「なるほど。細かい神業内容はわからなくても大体の系統は会場で割れるのか。細かいところは杜撰な学園だ」

「俺にやあそこまでひた隠しにする必要性がわかんねえけど」

「そんな考えじゃあイザって時に寝首を掻かれるぞ」

「どこの戦国武将だ、てめえは」

危機感を持ちすぎると全く持たないのではどっちが良いのかね。

「もうここの試験は終わったのか？」

「いんや、まだひとつ残ってるぜ。一応2つ受け終わってるが」

「ほほう、ちなみに得点は？」

「いまんとこ最高は97点だ」

「・・・チッ」

「てめえ今舌打ちしやがったな!？」

「お前、意外と優等生だな」

「まあ、見ての通りの野生児でな。体を動かすのは嫌いじゃねえ」

体つきから、運動能力が高そうだと思っていたが・・・

初見で視た（・・・）時から能力値は秀でているのは判っていたものの、それを十分扱いきれているようだ。

なかなかどうして、あなどれん・・・

「まあ、９７点も取れりゃあ安心だ。後はのんびり消化試合と洒落込むぜ」

「ここはそうかもしれないが、他の神業試験は済んでないだろう」

「今日の分はここだけだぜ？残りは明日からの個別試験^{オリジナルテスト}だけだ」

「じゃあさっさとホテルに帰ればいいだろう」

「いやあ、腹が減ったうえに体力が無くなったから休憩中だ」

「自由なやつだ。油断しすぎるなよ」

「わかってらあな」

「ったく。じゃ、試験時間になったみたいだから先にいくぞ」

「つてら」

寝転びながらこちらに右手を振っている和樹に一瞥をくれつつ、一つ目のステージへと向かった。

最初の試験科目は“動体視力”。

身体強化とは、なにも腕力や脚力を強化するだけに留まらない。回復力や力・聴力の強化もまた“身体強化の１つに該当する”

俺の神業はそのなかでも“感覚強化のジャンルだ。動体視力・平衡感覚などの情報処理を強化する”。

よって、“動体視力”と“バランス”の２つの試験を受けることにした。

該当科目のプレハブに入ると、例の如くナビゲーションが始まる

？こんちゃ。動体視力の試験をナビゲートするスピーーだよ？

スピーーならいつその事最後に“ド”をつけるといいたい。ちょっと
試行錯誤しやがって！

？ここでの試験内容は簡単！左右の穴から高速で発射される球体！
それに描かれた数字を読み取ること！ただそれだけ！？

実に単純明快だ。まさに動体視力を試すためだけにある試験といっ
ていい。

？ただし！球体ゆえに問題が生じちゃうんだ！ボールの回転方向に
よつては数字が球の死角に入っちゃう可能性があるんだよ！？

確かに。プレハブの中は柵があり、球が飛び交うあちらと俺がいる
こちらを区切っている。そのため、数字が見えないまま球が行き過
ぎてしまう可能性がある。

？その場合は！・・・・・・まあ運が悪かったってことで？

・・・・・・！！？

投げた！！完璧に完全かつ無欠に投げ捨てた！！

？一応向かい側の壁は鏡になってるから上手いこと活用してね！！？

しかも結構アバウト！いや、鏡を貼ってくれてるだけマシンなんだろ
うが・・・

まあ、とにかくやってみよう。

.....

結果は82点だった。マイナス点は鏡のせいだ。鏡に写ったせいで球数が二倍に視えたり数字が鏡写しに成ったりで、脳の処理が混乱してしまった。試験の改善を切に願う。

「和樹・・・まだ休んでたのか」

「おお、やっぱり腹が減ってりゃあ休んでも意味ねえってのが判った」

「お前・・・まあいい。俺の試験が終われば学食にでも行こう」
「そりゃいい。あと何分で終わりそうだ？」

「今1つ終わったところだ。残るひとつは15分後ってところか」

「おいおい、俺のお腹と背長に初対面かませって？」

「心配するな。人見知りじゃないんだし意外とウマが合うだろうさ」

「無責任な事言いやがって。知ってるか？妊娠するのはお腹と背中が絶交したから膨れてるんだぜ？」

「無責任どころか、無駄に無意味な冗談言わないでくれるか？」

「おつと悪いな、無意識だった」

とりあえず、試験開始まで和樹の事は無視することにした。

バランスの試験は、小さな台にのつて左右から飛んでくる障害物に耐えるといった内容だった。地味に台が揺れたり風が吹いたりと嫌味な邪魔が多かったものの、無事93点を得ることができた。結局和樹には勝てなかったが・・・

なんとなく凹む。

その後、ベンチで相変わらずダラダラしていた和樹を肩に担ぎながら食堂へと向かう。

始終横で「うーうー」と唸っている野生児を無視し続けながらな。

そのうーうー言うのをやめなさい。

「あれ？偶然だね那美さん」

「ありやりや、こりやどーも！しかし、和樹君が持つてるご飯・・・それはギャグなの？」

「ああん？こんなもん朝飯前の昼飯じゃねえか」

カツ丼・きつねうどん・カレー・焼きそばパン・メロンパン・味噌汁・豚汁・シーザーサラダにチヨレギサラダなど、むしろ評価できるのはその物量ではなく、それらを全て乗せられるトレーの大きさと持っている和樹のバランス能力だろう。

「いやあ、月並みだけどそれだけ食べて太らないのは重犯罪だよなえ」

「食費と運動量が常人の数倍近くなるが、それでもいいなら享受し

てやろうか？」

「体が肥えるか財布が痩せるかってことなら、私は前者ね！」

「ずいぶん俗物的で好感が持てるよ」

「酷いな諸君！庶民的なだけよ」

「・・・・・・あのお・・・・」

「しかし、試験中は学食が無料ってのは助かるぜ実際」

「確かにね。だからほら、ついご飯いっぱい持って来ちゃって食べきれるかどうか」

「そんなとき俺が食ってやるさ」

「あらやだ、なんだかそれってセクハラみたい」

「確かに那美さんの意見には頷ける。僕も那美さんのを食べてあげるよ」

「頷いた後に同じセリフを使えるのは流石ねえ」

「俺は誤用だが、お前は御用になれ」

「お縄にはなりたくないものだ」

「あのあの・・・・」

「だがしかし、亀甲縛りに使ってる縄ならお縄になってみたいかも！！」

「あいかわらずの変態っぷりだわ」

「まったく、こいつだきやあ食えねえよ」

「・・・・・・うう・・・・」

「ところで、最初から那美さんの横に座ってこちらの機会を伺いつつ、最後までタイミングを逃し涙目になっている女の子は誰なんだろう？」

すると、謎の女の子はパアアアアと輝く笑顔でこちら見てくる。辛抱たまらん。

というか、その子以外の三人は（少なくとも俺は）わざと話を繋ぎ女の子の介入を邪魔していた節がある。

「おっと、私としたことが忘れてたわ。こちら、同じ受験生の泣沢愛々（なきさわ めめ）ちゃん。同じグループで、なんとなく仲良くなったの」

「泣沢 愛々です。どうぞよろしくお願いします。」

「どうも、僕は伊滄諾です。どうぞ名前で呼びください」

「俺は和久産巢 和樹だ。和樹でいいぜ」

「じゃあ、諾くん・和樹くんと呼んでもいいですか？」

「望むところです」

「おういいぜ！」

「愛々ちゃんはちよっぱし泣き虫な所があるから注意してね！」

「望むところです」

「いや、望まれても困ります」

「なんか諾君フルスロットルね」

「消極的な女子がタイプなんじゃねえか？」

「失礼しちゃうわ！プンプン」

憤慨している那美さんとソレを見ながら笑っている和樹、いまいち場の空気に慣れきれてない愛々さんと共に食事をした後、全メンバーが試験を終えていたのでそのまま帰宅することにした。

火曜日は一日フリーなため、ホテルで和樹と試験内容を喋りながら過ごし、水曜日の個人試験が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7456x/>

そして天命を成就する

2011年11月7日16時09分発行